

令和4年度 嶺北特別支援学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
1 教育課程 学習支援 (小学部 低学年)	a 児童の自ら人や物に関わる姿を引き出すための教師の支援(児童への関わり方、声かけの仕方、環境設定)について教師間で検討し、共通理解を図る。	学部研究で発達段階に応じた関わり方等について継続して研修に取り組んだ。新任教職員が多く、共通理解を持つことが少し不十分だったが、保護者からは高い評価(満足度94.7%)を得られた。	今後は、年度当初に学部研究で発達段階に応じた関わり方等についての研修を行う。また、教職員間で児童の発達段階や実態について共通理解を持つために、クラスや低学年全体で定期的に話し合う時間を設け、支援の充実を図っていく。
	b 一人一人の発達段階や実態に基づいた目標を設定し、その目標を達成するための課題設定に取り組む。	児童の発達段階や実態を踏まえた支援の仕方を学んだり、授業研究で動画を見て適切な課題設定について話し合ったことで、おおむね目標を達成できた。保護者からも高い評価(満足度100%)を得られた。	教職員間で児童の発達段階や実態の共通理解を図るため、日常の観察等から得られる児童の特性に加え客観的なアセスメントを活用していく。また、保護者や本人のニーズを踏まえた上で、教職員間で定期的に話し合い、今後も適切な課題設定に取り組んでいく。
2 教育課程 学習支援 (小学部 高学年)	a 人に伝える力を高めるための支援方法について検討し、実践する。	児童の実態を的確に把握するため、標準化されたアセスメントを高学年全体で実施したり、教職員が児童の思いや理解を考えながら支援を検討したりしたことで、保護者からも高い評価(満足度96.5%)を得られた。	年度当初に人に伝える力について教職員間で共通理解を図り、アセスメントを有効活用して十分に話し合い、児童の伝える場面を意識した授業実践を行っていく。保護者懇談では、児童の伝える力について話したり、家庭での様子を聞き取ったりして、十分に共通理解を図っていく。
	b 集団に自ら参加しようとする意欲を引き出す指導の工夫に取り組む。	コロナ禍のため高学年全体で行うことが難しい活動は、学級単位の活動に変更し、単元によっては複数の学級で合同で行うなど、活動集団の規模を工夫して取り組んだことで、保護者からも高い評価(満足度93.1%)を得られた。	集団活動への参加が苦手な児童にも配慮しつつ、個の実態に応じた集団規模、集団活動への意欲を引き出す支援の方法を高学年全体で工夫していく。保護者にも集団活動への参加方法や必要な支援について共通理解を図り、学級通信等で取組を紹介していく。
3 教育課程 学習支援 (中学部)	a 生徒の発達段階やニーズを踏まえて教師間で協議し、具体的な目標を設定したり、支援方法を計画したりする。	生徒の個別の目標を設定する上で、発達段階やニーズを踏まえて話し合い共通理解を図って指導・支援をしたことで、保護者も、主に日常生活面や社会生活面、身体面で生徒の1年間の成長を感じ取ることができた。	実態が日々変化する学齢期の生徒に対して、適宜目標の修正を行いながら、最適な指導・支援について検討、実践していく。保護者に、生徒の学習の様子や成長過程が分かるよう、日々の連絡帳や学部だより、保護者懇談等を通して、丁寧に伝えていく。
	b 生徒の実態に応じ、学校行事や学部行事に向け、集団の中での役割や協力を意識した授業を行う。	体育大会や宿泊学習、文化祭などの行事に向けて、「集団の一員」としての意識を持てるよう、生徒一人一人に適した指導・支援を行ったことで、保護者からも高い評価(満足度91.5%)を得られた。	今後も各行事活動において、生徒一人一人に適した役割や協力の仕方などについて教職員間で考えて実践していく。保護者には、連絡帳や懇談の機会に、実際の様子を動画や写真で伝えることで、「集団の一員」としての活動方針について共通理解を図っていく。
4 教育課程 学習支援 (高等部)	a 卒業後に必要な力を身に付けられるよう、生徒一人一人に応じた適切な課題を設定し、指導を行う。	生徒の希望やアセスメントを通して学習班を編制し、個々の活動設定や支援を丁寧に進めたことで、保護者からも高い評価(満足度93.3%)を得られた。	今後も、実態や適性の把握を丁寧に進め、行動観察や生徒とのコミュニケーションを深めながら実践していく。また、保護者との日々のやり取り、実習評価等を踏まえて共通理解を図るなど信頼関係を築きながら、個に応じた適切な指導・支援を継続していく。
	b 生徒の働く活動について、活動内容や課題設定、生徒の様子について定期的に検討し、実践する。	日々の授業を振り返り、授業内容の工夫、課題設定や支援の見直し等を行い、授業改善に取り組んだことで、目標(90%以上)を達成できた。保護者の一部からは、「十分に意欲を高める取り組みがなされていない」という回答もあった。	様々な視点から授業改善を行うよう定期的な教職員間の話し合いの場を設定し、現場実習など第三者からの客観的な評価も十分に取り入れていく。また、より丁寧に個々の生徒の実態を捉え、小さな成長も見逃さず、保護者との積極的な情報交換に努めていく。
5 教育課程 学習支援 (寄宿舎)	a 寄宿舎生一人一人の実態や課題を職員間で共有し、適切な目標を設定して、統一した支援を行う。	個に応じた目標設定と実践により、寄宿舎生の成長に結びつけることができ、保護者からも子どもが成長したという高い評価(満足度92.7%)を得られた。	リノベーション工事やコロナ禍の影響で寄宿舎での生活経験が減り、子どもの成長を実感できなかった保護者も少数だがいたため、今後は、さらに支援を工夫し、保護者に丁寧に成長の様子を伝えていく。
	b 基本的な生活習慣の手立てを検討し、日々の支援につなげる。	個々の寄宿舎生に応じて支援を工夫したことで、それぞれに基本的な生活習慣を身に付けることができ、保護者からも高い評価(満足度92.3%)を得られた。	少数だが評価の低い回答もあったため、視覚支援や支援グッズの活用、日常的な対話、ライフタイムなど、今後も支援を工夫し、家庭生活にもつながるようにしていく。
6 健康・安全	a 保健指導 児童生徒の行動や体調を把握し、教職員間で共通理解を図るとともに、けがの防止や病気の予防に努める。	日々の児童生徒の丁寧な体調把握や、保健室・各学級での保健教材等を活用した指導など健康管理や生活指導を充実したことで、保護者からも高い評価(満足度98.8%)を得られた。	感染症に関する情報発信を引き続き行っていく。けがの防止や病気の予防については、全校で情報共有しながら取り組むとともに、必要な環境整備を行っていく。また、今後も保護者に連絡帳や保健便り等で積極的に情報発信し理解協力を促していく。
	b 安全指導 警察と連携して教職員の防犯研修を行い、学校の安全確保に努める。	警察署員による防犯研修を行い、動画視聴後にロールプレイを行うなど工夫したことで、教職員の防犯意識が向上するとともに、保護者からも高い評価(満足度97.2%)を得られた。	警察署員が来校して行った実践を伴う研修は、教職員の防犯意識を再度高めるのにも有効であったため、次年度も実践的な研修を行い、不審者対応マニュアルの定着に努めていく。また、保護者には、不審者対応の一つとしてリボンや名札の着用についてより周知徹底を図っていく。
7 生徒支援 進路支援	a 生徒支援(1) 体育大会や文化祭などの行事において、児童生徒の理解に努めるとともに、活動内容の創意工夫をして活動意欲を育てる。	体育大会や文化祭は、コロナ禍により保護者の観覧者数を制限したり、雨天中止により平日に学部毎の開催に変更したりしたが、教職員が各学部において児童生徒が意欲を持って取り組めるよう内容を検討・工夫したことで、保護者からも高い評価(満足度97.2%)を得られた。	体育大会は、今後、各学部毎の分散開催や熱中症対策として開催時期の見直しを検討していく。文化祭は、次年度も児童生徒が意欲を持って取り組むことができるよう工夫を凝らした企画とスムーズな運営を行っていく。
	b 生徒支援(2) 児童生徒の人権意識や規範意識の向上を図る。	研修等を通して人権に対する意識をより強く持って指導・支援を行ったことで、保護者からも、高い評価(満足度97.2%)を得られた。一方で、「あまり行っていないかった」という回答が一部あることを真摯に受け止め、教職員全体の共通意識として浸透させていく必要がある。	今後も、日々の児童生徒の不適切な行動や発言に気を配り、その背景を丁寧に探りながら、教職員の質の高い指導・支援につなげていく。人権を守ることは学校教育における基本であり、研修を継続実施することで教職員一人一人の人権意識や規範意識の醸成に努めていく。
	c 進路支援 将来の生活への関心・意欲が高まるように、進路に関する情報提供や進路学習の充実を図る。	小学部低学年段階では、卒業後の社会生活など将来についてイメージを持たせるための指導・支援が難しいことが伺える。保護者に対しては、次の学年や学部そして学校卒業後へと近い将来の生活から進路についてのイメージを持てるよう取組を工夫する必要がある。	コロナ禍のため進路関係行事に制限があったが、今後は、タイムリーな進路情報の発信を継続するとともに、小学部から高等部までの一貫した進路指導の大切さや、日常的な支援が進路に繋がっていくことについて、保護者や教職員全体に啓発する機会を増やしていく。
8 保護者・地域 との連携	a 懇談や送迎時等における児童生徒の状況確認の徹底と適切な対応を行ったり、連絡帳やICT機器を活用して適切な情報伝達を行ったりする。	教職員が、日々の送迎時や懇談の機会に、家庭や福祉サービス事業所と情報共有しながら指導・支援を行ってきたことで、保護者からも高い評価(98.4%)を得られた。特に、懇談時に言葉や文字だけでなく、ICT機器を用いて写真や映像の提示を定期的に行うことは有効であった。	懇談時にICT機器を有効活用した保護者との情報共有はとても有効であり、今後も継続していく。また、日々の送迎時に保護者や福祉サービス事業所と連絡帳や口頭での目撃を丁寧にすることに加え、定期的な懇談や支援会議を積極的に行うことで、連携・協力関係をより強化していく。